秋田魁新報　2022年06月18日付　県央

小滝番楽の舞に挑戦

仁賀保高生、伝統文化学ぶ

にかほ市象潟町の仁賀保高校（佐々木誠校長）の1年生44人が17日、同市象潟町小滝に伝わる「鳥海山小滝番楽」の舞や太鼓に挑戦した。

地域の自然や文化について学ぶ授業の一環。24日に全校が同校を訪れた。初めに会員鳥海山登山を控え、鳥海山の麓に伝わる伝統文化を学ぶために実施した。

この日は鳥海山小滝舞楽保存会（吉川栄一会長）の11人が、番楽の代表的な舞とされる「翁」を披露。面を着け、扇を持った舞い手がゆっくりと優雅に踊った。

保存会の会員が披露した演目「翁」

その後、生徒たちは新人の舞い手の登竜門とされる「三人立ち」の基本動作に挑戦した。三人立ちは3人1組で舞う演目で、長さ70センチほどの棒を持ち、はねたり、棒をくぐったりする動きが特徴。保存会員による三人立ちの動画を見てイメージを膨らませた後、舞と太鼓、かねの三つに分かれ、保存会員の指導を受けながら練習した。

舞を体験した生徒は、円をつくった3人がそれぞれ棒の両端をつかみ、手を離さないように棒をくぐったり、跳び越えたりする動きに挑戦した。初めのうちは「頭がついていかない」などと慣れないに苦戦していたが、徐々に覚え、うまく決まると声を上げて驚いていた。

舞を練習した岩澤晟梧さん(15)は「腕の回し方が難しかったが、こつをつかんでから面白くなった。自分の地域の芸能にも参加し、伝統を守っていきたい」と話した。

保存会の吉川会長は「小滝だけでなく、自分が住む地域の伝統行事に目を向けるきっかけになればうれしい」と話した。

鳥海山小滝番楽は、350年以上の歴史があるとされる。現在は保存会が15演目を継承している。

（進藤麻斗）

太鼓の演奏に挑戦する生徒

演目の一つ「三人立ち」の基本動作に挑戦した

©秋田魁新報社